高野房太郎の思想と生涯

辻野　功

一

日本労働組合運動の父とも言うべき高野房太郎は、歴史の上であまりにも冷遇されてきた。片山潜については、美化された神話とさえ言える話が常に語られながら、高野房太郎は意識的にか無意識的にか、常に無視されてきた。しかしながら、それにはそれ相当の理由があった。第一に、高野が日本の労働組合運動に関係したのは、明治三〇年から三三年初め迄の僅か三ヵ年にしか過ぎなかったばかりか、彼の三六年の生涯全体が、詳しくは知られていなかったからである。第二に、高野が終始労働組合主義に徹していたのに反し、高野の協力者であった片山潜は、その思想を労働組合主義から社会主義へと発展させ、後にはコミンテルン執行委員として、国際的にも高く評価されるにいたったが、後の共産主義者としての片山への高い評価から逆に、労働組合期成会時代における片山の過大評価＝高野の無視が生みだされたものと考えられる。この傾向は、日本の労働運動史学における伝統的な労働組合主義の過少評価と結びついて、促進されたものであろう。

しかしながら最近、高野房太郎に関する史料の発掘と、従来の傾向に対する労働運動史学の反省とによって、高野に対する正しい評価がなされるようになりつつある。史料的には、『労働世界』の覆刻、ハイマン・カブリン編著『明

治労働運動史の一齣』所収の「高野房太郎文集」、ことにその「英文篇」及び高野とサミュエル・ゴンパースとの書簡を紹介した隈谷三喜男教授の「高野房太郎と労働運動」（『経済学論集』第二九巻第一号所収）は、高野房太郎研究を飛躍的に発展させる土台を提供した。この小論は、これらの史料に拠りながら、高野房太郎が抱いていた思想と、その思想が労働組合期成会を中心とした運動に、どう生かされたかとを明らかにすることによって、黎明期労働組合運動の性格と、そこにおける高野房太郎の位置とを論じようとする試みの一つである。

二

高野房太郎の略歴は、高野岩三郎（房太郎の弟）執筆の『新訂版大日本人名辞書』中の「高野房太郎」の項目によれば、次のとおりである。

「わが国労働運動の先駆者、長崎の人、明治元年十二月二十四日長崎市銀屋町高野仙吉の長男として生る。法学博士高野岩三郎の兄なり。十年父母に伴われて東京に移る。横浜に汽船回漕業を営める叔父高野弥三郎の招きに応じ、父は其の生業たりし裁縫業を抛ち東京神田久右衛門町に於て回漕業兼旅宿業を経営することとなりたるにより、十二年父死亡の後も叔父の保護の下に母の主宰に依て営業継続せられしが、十四年神田の大火災に会い家屋燃尽、依って日本橋浪花町に移り引続き営業す。其の間神田千代田小学校及び本所江東小学校に学び小学の課程全部終了、直ちに横浜に赴き叔父の店に勤め傍ら横浜市立商業学校に学ぶ。十八年叔父歿するや十九年志を立てて米国桑港に渡航し、小雑貨店を開き余暇を以て桑港市立商業学校に入学其の課程を終る。雑貨店は幾くもなく閉鎖し其の後は専ら諸種の労務に従事し、その得る所を以て故国の母弟の生計及び学資に充て、傍ら主として経済学の独学自修に

励む。二十九年春帰朝、横浜日刊英字新聞ジャパン・アドバタイザー記者となる。……」

この短い叙述でも明らかなように、高野房太郎は青春時代の一〇年をアメリカで過したが、このアメリカ生活が彼の思想に刻印づけたものは、第一に資本主義文明の肯定であった。彼は、アメリカの資本主義文明を眼のあたりにして、その欠点を十分認識しながらも、資本主義がもたらす利点の大きさに、全面的な信頼を寄せたのである。第二に高野は、アメリカでは労働者の地位が政治的にも経済的にも極めて高いことに、強烈な印象をうけた。そして彼は、労働者の地位の向上ないし労働組合運動の発展と、資本主義の発展とは相関的であると、強く確信するにいたった。

このような高野が、労働問題に強い関心を抱いたのも、当然であった。彼は明治二五年には、サンフランシスコ在住の日本人によって組織されていた職工義友会に入会した。そして二七年三月以来、ＡＦＬ会長サミュエル・ゴンパースに、度々手紙を出して、労働組合運動について教示を仰ぎ、九月にはゴンパースと会見し、遂にはＡＦＬの General Organizer に任命されるにいたった。

このようにゴンパースの影響を強く受けた高野は、ひるがえって故国日本の文明化におもいをはせて、次のように論じた。

「文明国になるための必要条件は、何であろうか。それは帰納的に言えば、機械を使う能力を、発展させること以外の何物でもない。機械が最も広範囲に使われているところに、最も高度な文明がみられるのは事実である。未開国で、機械が使われたという例は一つもない。機械が文明の原因であるか、結果であるかは、実際には重要ではないが、しかし一つのことだけは、確かである。すなわち非文明は機械を必要としないし、またその逆も真である。

このように、国家を文明化するためには、機械の使用を可能ならしめるように、状況を変革することが必要である。機械の使用を可能にする条件は、大量消費である。その他の条件のもとでは、機械の使用は不可能である。何故なら、機械は大量生産のもとにおいてのみうまく使われ、そして機械の使用は、概して消費力が微々たる程度に限定されている未開国では、知られていないからである。[1]」

それでは消費力の規模を拡大する途は、どこに求められるであろうか。それには二つの途が考えられる。第一は、国外市場＝貿易の拡大である。貿易に「富国策[2]」を求めれば、それは必然的に低賃金の是認となる。すなわち、低賃金に基づく貿易の拡大である。高野はこの方策に対して、「新聞・雑誌は、一つの例外もなく一致して、あたかも外国貿易が国家繁栄の唯一の源泉であるかの如く、低賃金状態が外国貿易拡大の大きな刺激であると、主張している[3]」が、しかしながら、国外市場は国内市場に対して、相対的に低い地位しか持ちえないうえに、外国貿易は相手国政府の貿易政策の変更によって杜絶し、あるいは杜絶しないまでも、容易に変動するのは歴史の証明するところであって、富国の唯一の基礎を貿易に置くのは誤りであると主張した。

第二は国内市場の拡大である。国内市場の拡大は、必然的に「人口の最大の部分をなす[4]」労働者階級の消費力を、拡大することにかかっている。高野はこの途について、次のように主張した。

「或者は、低賃金は産業の発達に必要であり、それゆえ賃金を上げようとするいかなる努力も、社会秩序にとって有害であると言う。これ以上誤ったことは、ありえない。それは枝を繁らせるために、木の根を枯らすのと同じである。なぜなら低賃金は少量の消費を意味し、少量の消費は少量の生産を意味し、少量の生産は小規模の工業を意味し、小規模の工業は小規模の富を、それ故停滞と衰退を意味するからである。……労働者の状態を改善するこ

とは彼らの生活様式を高めることであり、彼らの生活様式を高めることは消費を増すことであり、消費を増すことは生産を増すことであり、そして生産こそは国家繁栄の基礎である。このように労働者の状態を改善するすべての努力は、国家にとって決定的に重要である。[5]」

高野はこのような立場にたって、日本の労働者の状態を考察した。しかしながら高野が見いだしたのは、低賃金・過度労働の「原生的労働関係」のもとで、呻吟している労働者の姿であった。「国家の盛衰は、労働問題の解決にかかっていると言って過言でない[6]」のに、「労働運動は、残念ながら日本には存在しない。……過去数年間に、三回か四回、ストライキと称する事件があった。しかしながら、それはたんに労働者の間における、感情の突然の爆発の結果にすぎず、組織的な、あるいは発達した運動と呼びうるものは、何もなかった[7]」のである。その原因は、何であろうか。これに対して高野は、「日本において労働運動が存在しない原因は、日本の労働者の間の無知以外の何物でもない[8]」と答えている。また別の箇所では、労働者自身の「無産無蒙」、「不徳軽薄[9]」が、その原因であるとも言っている。

それでは、このような状況に対して、どのような対策が取られるべきであろうか。それは、「宣伝」と「組織」と「教育[10]」である。しかしながら、これらの仕事が、労働者自身の間から始められることを期待しても無駄である。「彼等は自ら其地位を改良するの力な」く、「彼等は実に之が救済主の来らんことを渇望[11]」しているからである。しかしながら「わが祖国の人々が、大抵労働運動の国家的重要性を確信していながら、しかもなお労働者自身がたちあがる日をむなしく待っている以上に、馬鹿げたことはない。労働者自身以外のなんらかの力が、彼らを激励しない限り、そのような時は決して来ない。[12]」それでは「救済主」を、どこに求めるべきであろうか。それは、「この国の有識者以

外にない。……彼らからのみ、労働運動は起りえ、そしてその生命に刺激を受けることができる」[13]からである。しかしながら高野は、失望落胆した。なぜなら、「労働運動についての彼らの無知は、労働者の一般的な知恵の欠如より、もっとひどいものであったからである。」[14]日本の労働組合運動の唯一の源泉である「有識者」が、このような状況である以上、運動は絶望的であった。それにもかかわらず、高野は次のように論じて、失望の中にも希望を見いだした。

「彼らに、彼らの行動の必要性を喚起させることは、労働者に組織的な努力の必要性を喚起させるほど、困難な企てではないように、私には思える。」[15]

高野は、いくたびかの絶望の後、希望と確信に到達した。出稼者としてアメリカに渡った高野は、かくして、日本労働組合運動の創始者たるべき使命を担って、明治二九年に帰国したのであった。

(1) "Labor Movement in Japan" ハイマン・カブリン編著『明治労働運動史の一齣』所収六―七頁。
(2) 「富国の策を論じて日本に於ける労働問題に及ぶ」同右一〇五頁。
(3) "Labor Problem in Japan" 同右二四頁。
(4) "Labor Movement in Japan" 同右七頁。当時も、現在も、日本の労働者階級は、「人口の最大の部分をな」してはいない。このような点にも、後に触れるような高野の理論の直輸入性があらわれている。
(5) 同右六頁。
(6) 同右三頁。
(7) 同右七―八頁。
(8) 「日本に於ける労働問題」同右九〇頁。
(9) "Labor Movement in Japan" 同右八頁。
(10) 「日本に於ける労働問題」同右八九―九〇頁。
(11) "Labor Movement in Japan" 同右九頁。
(12)
(13)

(14) 同右九―一〇頁。
(15) 同右一〇頁。

三

一〇年ぶりで帰国した高野は、しばらくの間、横浜の日刊英字新聞『ジャパン・アドバタイザー』の記者となったが、明治二九年一二月には、『ジャパン・アドバタイザー』をやめて上京し、いよいよ労働組合運動に着手する準備を始めた。翌三〇年四月には、「日本に於ける労働運動の時期已に熟せ」[1]りとみて、サンフランシスコ時代の職工義友会のメンバーであった沢田半之助、城常太郎らとともに、職工義友会を結成した。[2]そして四月六日には、この職工義友会の主催のもとに、「我国ではかってなかった、労働運動の唱導のみを目的とした大衆集会」が開かれた。その時の模様を、高野は次のようにゴンパースに報告している。

「豪雨にもかかわらず、数百名の労働者が出席し、労働問題の心からの理解者・佐久間貞一、帝国大学学士・田島錦治、社会問題研究家・竹内鉄五郎の諸氏と、私自身によって、演説が行われました。……私自身は労働者の組織化こそ、労働者の利益を促進する最良の手段であることを論じ、相当長く労働組合の結成方法を述べ、アメリカの労働組合とAFLの計画を説明しました。……

その集会では、私が書いた一冊のパンフレットが配られましたが、その中には、組織的な行動の利点、組織計画、合衆国で広く行われている共済制度などが、詳しく述べられていました。私は、それがこの国で出版されたこの種の最初のものなので、その写しを同封します。[3]」

この演説会の席上で配布されたパンフレットが、有名な「職工諸君に寄す」であることは、疑いの余地がない。「職工諸君に寄す」は、次のように述べている。

「来る明治三十二年は実に日本内地開放の時期なり。外国の資本家が低廉なる我賃銀と怜悧なる我労働者とを利用して、巨万の利を博せんとて、我内地に入り来るの時なり。されば性行風俗習慣の相異あるのみならず、兼ては労働者を苛遇するとの評ある彼等外国の資本家は、今より三年ならずして将に諸君の雇主たらんとす。形勢此の如くなれば、諸君は今よりして早く此に対する準備をなさずしては、或は欧米労働者の受けたると均しき弊害に苦しむなきを必すべからざるのみならず、亦近時の有様を以てすれば、同じく我国民たる雇主と諸君との関係も、工場、製造所等の増すと共に日々変化を生じて、到底実利以外情実の入るを許さず、強き者は勝ち、弱き者は破られ、優る者は栄え、劣る者は倒るゝの時世に赴きつゝあることなれば、此間に立ちて能く勝ち能く栄ゆることは、仲々容易の業にあらず、況して外国人も入り来ることなれば、諸君は覚悟の上に覚悟をなし、かの他人の為めに苦境に陥れらるゝことなく、競争の巷に寛かに其の地位を保つの工夫を為すこそ肝要ならめ。……

諸君の為さゞるべからざる準備覚悟行為は、前陳の如くなる以上は、如何にして之に応ずべきかとは、諸君の自然に起す疑問なるべし。或人は言う、『今日のこと誠に言うに忍びず、富者益々富み、貧者益々貧し、労働者の蒙る不正、其沈淪せる境遇、実に悲憤の極にして之を改良せんとする唯革命あるのみ、貧富を平均するにあるのみ』と。誠に愉快の議論にして、論者の言う如く革命に依りて全然改良の実を挙げることを得ば、結構の次第なれども、世間のことは論者の思う如く、左程単純の者にあらず、意外の事起り、為に全く当初の目的を達し得ざるの奇観は、大紛擾の下に於て屢々見る所、諸君の容易に賛成すべきことにあらず。且つ又社会の進歩なる者は、常に遅緩にし

て秩序ある者なるに、革命なる者は之に反して、急速突飛を要素とすることなれば、両者の行道全然相反するのみならず、元来貧富平均のことたる、人に賢愚の別ある以上は、其財産に不平均あるは誠に已むを得ざることなれば、貧富平均論は言うべくして行うべきことにあらず。されば我輩は諸君に向って、断乎として革命の意志を拒めよ、厳然として急進の行いを斥けよ、尺を得ずして尋を求むるの愚は、是を貧富平均党に譲れよと忠告するに躊躇せざる者なり。

而して我輩の諸君に勧告する所は、同業相集り同気相求むという人類至情の上に基礎を置ける同業組合を起して、全国連合共同一致以て事を為すことにあり。……諸君にして堅く集りて散せず、社会進化の大勢に伴いて、内健全なる思想を養い、外着実なる行動をなし、以て外人に対し、無情の雇主に対し、将た又弊風の矯正に努めんか、世間諸君の意の如くならざる者何かあるべきや。況して労働は神聖にして、結合は勢力なり。神聖なる労働に従事する者にして勢力ある結合を作る。羽毛能く船を沈め得べくんば、諸君の熱血の迸る所何事をか為し得ざるべき者あるべき。……」

このように論じた後、高野は、次のような具体的プランを提示した。

「第一、一郡市内同業七人以上ある職業者集まりて地方同業組合を設くべし。

第二、一郡市内にある種々の同業組合連合して地方連合団を設くべし。

第三、全国処々にある地方同業組合連合して全国同業連合団を設くべし。

第四、全国処々にある全国同業連合団を連合して大日本同盟団を設くべし。」

この「職工諸君に寄す」は、黎明期労働組合運動の性格を、みごとに浮彫りにしている。すなわち高野たちが、労

働組合運動をはじめるにいたった直接的契機は、内地雑居というナショナルなものであり、従ってここに展開される労働組合運動は、当然労資協調的な運動である。高野は他の箇所では、「私は労働者の状態が哀れであり、彼らの環境が彼らの利益に極度に対立しているという理由から、労働運動の必要性を主張しているのでもなく、また人道的な同情から主張しているのでもない。私は、国家が将来繁栄しようと思えば、それが必要であり、将来文明化しようと思えば、それは不可欠のものであるという理由から、それを主張しているのである」[4]と、「国家繁栄のため」という労働組合運動のナショナルな性格を、より直截に論じた。高野が、アメリカ時代以来念願としていた「日本を文明化するための労働組合運動」が、まさに目前に迫らんとする内地雑居を契機にして、以上のように結実したのである。従って高野は、単純な労働運動家ではなくて、思想的には、「一身独立して一国独立す」と主張した福沢諭吉らの系譜につらなるナショナリストなのである。

職工義友会は六月二五日、第二回演説会を開いたが、演説終了後高野は、職工義友会を代表して労働組合期成会設立を訴え、来会者の賛同を求めたところ、四七名がこれに応じた。かくして七月五日、片山潜をはじめとして七一名の参加のもとに、労働組合期成会が設立され、「労働組合期成会設立趣旨」が発表された。高野は、片山、沢田らと共に期成会の幹事に選ばれ、そして幹事会の互選の結果、幹事長に就任した。労働組合期成会は、「労働組合を奨励し結成するための組織」[5]であるが、この期成会の指導のもとに、明治三〇年一二月には日本最初の近代的労働組合である鉄工組合が、『労働世界』の発刊と時を同じくして生まれ、三一年四月には、その年二月の待遇改善要求のストライキに勝利した日本鉄道の機関手、火夫らによって日鉄矯正会が結成された。ついで三二年一一月には、期成会よりも社会政策学会の桑田熊蔵、金井延らから、より大きい影響を受けた活版工組合が結成された。高野は三組合中、特

に鉄工組合と関係が深かった。高野は、鉄工組合の「創立委員会議長」[6]を務め、一二月一日の結成式には、開会の辞を述べた。労働組合期成会幹事長としての高野は、席の温まる暇もない程、東奔西走して運動の発展に努めた。高野は、現在記録に明らかなだけでも、五〇回近く演説会に出席して、労働組合の結成を説き、工場法の必要を訴えた。三一年七月には、片山と共に東北遊説に赴き、三二年七月には、神戸における清国労働者非雑居期成同盟演説会に出席した。

黎明期の労働組合運動は、このように精力的に活動する高野と、片山との指導によって、順調に発展していった。鉄工組合は、設立時の明治三〇年末には組合員一一八三名、三一年末には二七一七名、三二年九月には約五四〇〇名に達し、日鉄矯正会は、三二年初め約一〇〇〇名の組合員と一万円の積立金を有し、暮には五万円のストライキ基金と二万円の共済基金を有するにいたった。活版工組合もまた、設立当時既に約二〇〇〇名の組合員を有していた。そして労働組合期成会の会員は、明治三〇年末の約一二〇〇名から、三一年末約三〇〇〇名、三二年末約五七〇〇名へと発展していった。

このように展開された黎明期労働組合運動の過程は、高野の思想である一般的な労働組合主義の現実への適用であったばかりではなく、彼がかねてから主張していた、より具体的方針の実践への適用でもあった。その一つは、「名望ある有識家之（＝労働組合運動…辻野）を率いんことを要す」[7]の実践であった。労働組合期成会の結成には、佐久間貞一秀英舎社長、島田三郎衆議院副議長、日野資秀伯爵、鈴木純一郎東京工業学校講師、松村介石牧師らの協力を得たが、鉄工組合結成式には、その他に三好退蔵前大審院長、志村源太郎農商務省工務局長、織田農商務省文書課長、高野岩三郎（後に東大教授）らの出席をえた。高野は、「この国の工業の歴史において、鉄工組合程多数の組合員をも

って結成された組合はかってなかったのみか、政府の役人や資本家が出席した集会が、労働者の主催で開かれたこともいままでにはなかった[8]とおおいに満足した。彼は「名望ある有識家」の中でも、特に佐久間貞一を尊敬し、印刷工場・秀英舎における彼のロバート・オーエン振りを、詳しくアメリカに紹介している。[9]

他の一つは、「労役者結合の目的は単に間接の利益に止らず、以て直接の利益を労役者に与えんことを要す」[10]の実践であった。それは共済制度と共働店＝消費組合であった。労働者を組織するには、間接の利益はもちろん、直接の利益が重要であることを知っていた高野は、共済制度を鉄工組合で実施した。鉄工組合では、組合員からわずかずつの会費を徴収して、疾病、死亡等に扶助をしたが、それは「組合員の間で急速に人気をえ」[11]、団結を強めるのにきわめて有効であった。また『労働世界』は第六号（明治三一年二月一五日）に「共働店の利益」、第一四号（三一年六月一五日）に「共働店は労働者の城郭なり」を載せて、共働店の意義と設立方法を労働者に説いたが、高野は共働店の模範規約を作成し、「鉄工組合第何支部共働店規約」として、『労働世界』第一四号に発表した。そればかりでなく、高野は三一年一二月には鉄工組合第三（横浜）支部を指導して、消費組合共営合資会社を設立し、彼自身期成会常任幹事を辞任して、共営合資会社の責任者となり、「店を永久的な基礎の上にすえる」[12]ために九ヵ月間も努力した。さらにまた労働組合期成会の常任幹事に復帰した後の三二年秋には、京橋本八丁堀でも石川島造船所、沖電機等の労働者を対象に、消費組合共営社を設立した程であった。

(1) 「労働組合期成会成立及発達の歴史（一）」『労働世界』第一五号。
(2) "Our Organizer in Japan" によれば、創立メンバーは「洋服屋と二人の靴工と私（＝高野）自身」である。洋服屋は沢田半之助であり、靴工の一人は城常太郎であるが、もう一人の靴工が誰であるかは、明らかになっていない。
(3) "Our Organizer in Japan"『明治労働運動史の一齣』四七―四八頁。

(4) "Labor Movement in Japan" 同右六頁。
(5) "Prospects of the Japanese Labor Movement" 同右五六頁。
(6) "A New Trade Union in Japan" 同右七〇頁。
(7) 「日本に於ける労働問題」同右九二頁。
(8) "A New Trade Union in Japan" 同右七〇頁。
(9) "Prospects of the Japanese Labor Movement" 同右五六―五九頁。
(10) 「日本に於ける労働問題」同右九四頁。
(11) "Rodo Kumiai Kisei Kwai" 同右一一二頁。

四

労働組合主義を指導理念として発展してきた黎明期労働組合運動も、その過程で、新しい問題を生みだした。それは高野的労働組合主義のコースと、『労働世界』に拠る片山的社会主義のコースとの対立であった。労働組合期成会は、明治三〇年一〇月一〇日の第三回月次会において、機関誌発行を決定した。この決定に基づいて労働新聞社が設立され、一二月一日に『労働世界』が発刊されたが、この『労働世界』の編集部長に片山潜が選ばれた。『労働世界』がどのような思想を抱いていたかは、次の如き創刊号の社説に明らかである。

「労働世界の方針は社会の改良にして革命にあらず。其の資本家に対するや敢て分裂的争闘を事とせんとするにあらずして真正の調和を全うせんとするにあり。……労働世界の目的は、『労働は神聖なり』、『組合は勢力なり』との金言を実行せんとするにあり。蓋し我労働者の労働をして神聖ならしめ、組合の勢力たる実を揚げしむるは、正しく日本工業の発達の基礎を安置するものなり。」

このように、『労働世界』の思想的立脚点は、労働組合期成会のそれと完全に一致していた。すなわち両者は共に、資本主義体制そのものを問題にする意識を全然持っていなかったのである。このような状態は、『労働世界』が第二七号（明治三二年一月一日）に「社会主義」欄を設けるまで、一年余り続いた。

「社会主義」欄を設けた趣旨を、『労働世界』は「吾人は此の欄内に於て毎号欧米に於ける社会主義の大勢を記して以て実際に社会主義は二十世紀の人類社会を救うの新福音なるを示さんとす」と述べた。『労働世界』が一年前の第五号（三一年二月一日）において、始めて「社会主義」に言及し、「社会主義の立論は根拠頗る強固なる者にして、其抱含する所の真理や頗る味うべき者」があるが、「労働世界に社会主義を主張する者に非ず、又無政府主義を唱うる者に非ず、又虚無党主義を奉信する者に非ず、唯だヒューマニチーの光明を仮て我労働運動の前途を照らさんと欲するのみ、吾人の要求する所は労働者の改良、其教育、其生活、其道徳の改善に在るのみ」と論じたことを考えあわせるならば、その間における社会主義への傾斜の大きさが明らかになる。『労働世界』への社会主義の導入は、編集部長片山のイニシャチブによるものであった。片山は元来ラッサールを理想としており、当時社会主義研究会（明治三一年一〇月結成）に加入し、そこで安部磯雄、村井知至らのキリスト教社会主義者から、大きな影響を受けていた。勿論当時の片山の社会主義は、厳密な意味のそれではなく、せいぜい都市社会主義ないし協同組合社会主義程度であった。しかし当の片山は、自分を社会主義者であると考えていたのであり、また当時にあっては、片山程度のものも社会主義者と考えられていたのである。

「社会主義」欄はその後毎号、欧米の社会主義運動を報じ、社会主義の理論的問題をとりあげた。また第三三号（三二年四月一日）の「論壇」においては、村井知至が「余れは有り体に言うべし労働組合の帰着は社会主義なり」と

論じたが、「労働組合の帰着は社会主義なり」という主張は、必然的に労働組合運動と社会主義運動との結合の主張となった。

このような社会主義への傾斜は、労働組合運動に大きな波紋を投げかけ、労働組合主義者からの反論をよびおこした。その現われが、『労働世界』第三四号（三二年四月一五日）に載せられた、労働組合期成会の寄書「労働世界に警告す」であった。それには次のように述べられていた。

「抑も期成会は元来政社にあらず、純然たる経済的団体たり、然るに友人労働世界は社会主義だとか、政事運動の必要だとかサモ労働者を煽動せんとするもの丶如く頻りに政事の現状を論評し又稍もすれば坑撃の鋒を資本家に向け却って薄弱なる労働者を悪むに至らんとす、吾人は労働世界が労働者の為めを思う熱情心より出たる言語なるを信ずるも期成会も亦労働世界の如く社会主義を以て宗教とし同盟罷工を以て労働運動の唯一の武器となす激烈なる団体と誤解さるゝの不幸に陥るの憂いあり」

これに対して『労働世界』は、第三六号（三二年五月一五日）において「吾人の地位」と題して、次のように反論を展開した。

「世に或る者は我紙面を批難して余り激烈なり、無骨なり、坑撃的なり、斯る句調を以て進まば遂に上流社会の同情を失うべしと言う、……労働世界は此十有八ヵ月間毎月二回は必ず労働の神聖を説き、又労働者団結の勢力なることを述べたり……労働世界は、社会主義の人類主義なることを示し且つ之が解釈の労をいとわず、然り社会主義の人類主義にして、一般社会に稗益あるを示すと同時に、無政府主義、露国虚無主義の恐るべきを示し且つ此無人情の個人主義に正反対を表したり、吾人は未だ曾て激烈なる挙動を表せず又激烈不法なる所為に賛同せず常に実

際的に尽力し職工社会の自重を増すに努めたり、……吾人は真理を以て干戈となす、真理を言うに当てや、吾人は毛頭も憚る所なし、我が批難者が吾人の真理と信ずる所の言を駁するか、吾人は決して一点一角も譲らざるなり」

このような労働組合期成会と『労働世界』との対立は、結局のところあくまで労働組合主義に徹する高野と、社会主義政党運動との結合に労働組合運動の新たな発展の途を見いだそうとする片山との対立であった。『労働世界』は、前者は「労働問題を経済の範囲内にて解釈せんとする」立場であり、後者は「労働問題は固より経済問題として研究せざるべからざるも亦た之が解釈を講ずるに至ては政治上よりも打算して根本より改新を計ざるべからずと言」[1]う立場であると、位置づけている。

高野と片山の対立は、活版工懇話会（活版工組合の前身。三一年八月結成）をめぐっても現われた。活版工懇話会は、元来労働組合期成会よりも、島田三郎や社会政策学会の桑田熊蔵、金井延らから強く影響を受け、運動方針をまったくの労資協調においていた。この活版工懇話会の方針を、高野は積極的に支持していたのに反し、片山はきわめて批判的であった。活版懇話会は、明治三二年七月九日、神田青年会館において演説会を開いた。この日桑田熊蔵（改良主義）、高野房太郎（日本の労働運動の方針）、片山潜（調和主義と社会主義）、金井延（社会主義を駁す）、島田三郎（工業家の責任）、神保院長[2]鈴木篤三郎（労働と赤痢）が演説を行った。まず桑田熊蔵が「労働者と資本家とは経済上の組織から相調和せずんば非ざることは、経済上の原則と言って可なり」[3]と説き、つづいて高野が労資協調論を説いたのに対し、片山は「資本と言うものは必要である、労働と言うものも必要である、仮令労働かあっても資本か無ければいけないです、資本かあっても労働者かなかったなればいけないです、併し私は此資本を監理して居る所の人間、此資本を左右して居る処の人間は、今日の如き有様ではいけないと思う、……私は一歩を進めて、資本と言

うものを労働者が持つことが出来たなれば持たせるが宜いではないか、と斯う言うのです、……

此前座を為されたお方とは私は正反対の意見を持っている、私は社会主義と言うものは宜いと思うです（拍手喝采）鉄道は国家が所有して宜いと思う、水道の如きも東京市が所有して居ります如く、一個人よりかまだ社会全体が持った方が宜いと思う[4]」と論じた。ところがつづいてたった金井延は、「抑も職工組合の成功したるは何によるか、所謂政治上の関係を絶ち、経済上の目的に進むが故なり」と、労資協調論を展開した後、「今日の経済組織を根本的に改革するのと、其組織内にある事業につき或る経営につき、これと相似たる方針をとると大に異なる所なりとす、成程鉄道国有主義なぞを主張する米国の或る学者或はビスマルクも畢竟社会主義なりと言える人あれ共、之は言葉の使い方にして夫は人の勝手に附したるのみ、一般に認むる処に非ず[5]」と、片山を鋭く批判した。この演説会では、もちろん片山自身も述べているように[6]、桑田、金井と片山との対立が主軸をなしているが、高野と片山との対立が、副次的な要素になっていることも見逃せない。

このように高野と片山との対立をはらみながらも、労働組合運動は明治三二年末まで順調に発展した。しかしながら三三年にはいると、労働組合期成会の運動は、急激に衰退に向った。鉄工組合、日鉄矯正会、活版工組合が衰退に向かった契機は、それぞれ異なってはいたが、その母体である労働組合期成会の衰退の原因は、「工場法の制定せられざりしに失望せしと、真に労働運動の真理を了解せず、唯だ景気につり込まれて入会せしもゝの続々退会せしと、重なる運動者が生活問題よりして心ならずも専心期成会の為めに尽す能わざるに至[7]」ったことである。更に労働組合運動の衰退を決定的にしたのは、絶対主義の権化・山県内閣が明治三三年三月に制定した治安警察法であった。治安警察法は、それ迄の集会及び政社法による言論・集会・結社などの自由に対する規制を一層精密周到に整備したにと

どまらず、その第一七条によって労働者の団結を事実上禁止したのである。

このような状況に対して、当時既に社会主義協会の会員であった片山を中心に、労働組合期成会幹部の多くは、「今や治安警察法制定と供に既に開始した労働運動も其方針を一転して政事運動として決行せざる可からざる気運に至れり」として、「労働者独立政党を組織して平和の下に政事運動を為す事」、「政事運動の第一着として普通選挙を得るに極力先峰を向くる事」[8]を主張した。これに対し高野は『労働世界』第六〇号、六一号の「論壇」に「職工組合に就て」を発表し、治安警察法を制定して「此有益なる団体を滅さんとす」る支配階級に向かって「反省を求めて止まま」なかったのみならず、社会主義政党運動に局面打開の途を求める同僚にも強く反省を求め、あくまで労働組合主義に徹することを主張した。しかしながら高野の抵抗は――支配階級への抵抗のみならず、同僚への抵抗も――無益であった。

日本を欧米のような文明国に引き上げるために、一身を犠牲にして労働組合運動にとりくんできた高野にとって、その国家が、労働組合運動に弾圧を加えたことは、致命的打撃であった。将来においてもまた、闘いが無益であると考えた高野は、労働組合運動から完全に退き、再び新聞記者になり、明治三三年五月に勃発した北清事変を契機にして、九月には中国へ渡った。そして中国各地を転々流浪した高野は、明治三七年三月一二日、肝臓膿腫のため、青島のドイツ人病院で、三六年の短い生涯の幕を閉じた。

(1) 「労働問題と社会主義」『労働世界』第四六号、明治三二年一〇月一五日。

(2) 神保院（在神田北神保町）は、明治三一年一月以来、労働組合期成会及び鉄工組合に対し、会員の診察料を無料、薬代を半額、入院料を三分の二にし、また院長は時々工場衛生、職工衛生について講演することを約していた。

(3) 桑田熊三「労働と資本の関係」『労働世界』第四三号、明治三二年九月一日。（尚『活版同志会々報』より『労働世界』第四六号に転載された

(4)「桑田熊三氏の社会主義」は、同一演説の概要であろう。）
(5)「片山潜氏の社会主義」『労働世界』第四六号、明治三二年一〇月一五日。
(6)「金井延氏の社会主義」同右。
(7)片山潜・西川光次郎著『日本の労働運動』一〇二頁参照。
(8)同右七四頁。
「労働運動の前途」『労働世界』第五七号、明治三三年三月一五日。

五

高野房太郎は名実ともに、黎明期労働組合運動第一の指導者であり、労働組合期成会の運動は、高野がアメリカ時代以来抱いていた労働組合運動のプログラムを、実践に適用したものであった。労働組合主義という言葉で特徴づけることのできる高野の理論は、歴史的に評価すれば基本的に正しいものであったが、にもかかわらずマイナスの側面をも併せ持っていたことを、否定できないのではなかろうか。すなわちマイナスの側面とは、彼の理論があまりに直輸入的でありすぎたことである。勿論ＡＦＬをモデルにした職業別組合主義の組織方針は、隈谷教授も指摘しているように、[1]当時の日本にそれを可能にする客観的条件が既に存在していた。更にまた、ゴンパースが極度のインテリ不信であったのに反し、高野は日本の特殊な状況から、「名望ある有識家」が指導し、協力しない限り、日本に労働組合運動は育たないと主張した点で、土着化への大きな努力が認められる。それにもかかわらず基本的な点、すなわち高賃金論を中核とする労働組合主義はアメリカ産の直輸入であった。欧米資本主義が既に帝国主義段階に突入していた時に、原材料を外国に依存して資本主義化を開始した日本は、高野の理論とは丁度逆に、労働者に低賃金を強いて、低価格を武器にして、国外市場＝貿易に、「富国策」を求めざるをえなかった。典型的に発展した先進資本主義国ア

メリカで有効であった労働組合主義も、原材料を外国に依存した弱体な後進資本主義国日本では、そのまま有効性をもつわけにはゆかず、そこでは、労資協調の労働組合運動さえ危険視されたのである。工場法の流産と治安警察法の制定は、このことを象徴的に示した。このような日本資本主義の特殊な性格を十分考慮に入れたうえで、労働組合運動の理論・方針をねり上げ、かつそれをねばり強く展開するという点に欠けたのは、惜しみてもあまりある。

しかしながら以上のことから、労働組合主義に徹した高野房太郎が誤りで、社会主義政党運動に脱出口を求めた片山潜が正しかった、と結論することはできない。労働組合運動と社会主義政党運動との結合を正しく主張していた片山も、治安警察法制定を契機に、労働組合運動を「政事運動として決行せざる可ら」ずと論じ、労働組合運動を社会主義政党運動に解消してしまった。片山潜は、この新しい方針に立って、明治三四年五月一八日、安部磯雄、幸徳秋水らと共に社会民主党を結成した。しかしこの社会民主党が、労働組合運動を壊滅させたあの治安警察法の第八条第二項違反を口実に、即日禁止になったのは、片山にとって皮肉な出来事であった。かくして片山のコースも挫折を余儀なくされたのであった。

労働組合運動の転換が叫ばれながら、いまだ確乎とした進路が定まらぬかにみえる現在、挫折したとは言え、黎明期労働組合運動の歴史と理論から、我々が学ぶべきものは少くない。そして高野房太郎を、デモクラシーの課題とナショナリズムの課題とを結合させようとした思想家の一人として、日本労働組合運動史の中に高く位置づける必要が、今日程大きいことはない。

(1) 隈谷三喜男「労働運動の生成と推転」『日本経済史大系六』所収三五六―七頁参照。

高野房太郎年譜

高野房太郎の年譜には、彼の弟高野岩三郎が執筆したもの（『新訂版大日本人名辞書』第二巻所収）と、ハイマン・カブリン教授が作成したもの（『明治労働運動史の一齣』所収）があるが、両者ともに詳しいとは言えず、その上相当箇所の誤りがあるので、従来の年譜の誤りを正した上、彼の生涯の全貌を知ることができよう、一見ささいと思われることまでをも収録した。尚論文欄の日付は、発表年月日である。

	事蹟	論文	関連事項及び註
一八六八年（明治一年）	二月二四日高野仙吉の長男として長崎市銀屋町に生まれた。		
一八七七　（一〇）	東京へ移転。横浜で汽船回漕業を営んでいた叔父高野弥三郎の勧めにより、房太郎の父は生業であった和服裁縫業を抛ち、東京神田久右衛門町において、回漕業兼旅館業を始めた。		
一八七九　（一二）	父死去。家業は母の手で続けられた。		
一八八一　（一四）	神田の大火災で家屋焼失。日本橋浪花町に移り、家業を続けた。この間神田千代田小		

		学校及び本所江東小学校に学び、小学校八年の課程を修了。その後直ちに横浜に赴き、叔父の店に勤める傍ら、横浜市立商業学校に学んだ。 横浜在住中、同地の好学の青年と横浜講学会を組織、更にこれを同攻会*支会横浜講学会と改称、自らその幹事となって、東京専門学校の講師を招いて、政治経済問題等の講演会を開き、また研究、討論を行った。それには高田早苗、天野為之などもしばしば出向いた。	
一八八五	（一八）	叔父死去。	
一八八六	（一九）	一一月　渡米。旅券は一一月二五日付。渡米目的は「商業研究」。サンフランシスコで日本品の小雑貨店を開いたが、いくばくもなく失敗に終った。	
一八八七	（二〇）	サンフランシスコでの小雑貨店が失敗したため、一たん帰国し、再起の策を講じようとしたが、母を扶養せねばならない上、弟岩三郎が第一高等中学校に合格し学費を必要としたので、年末に再び渡米し皿洗い等の家庭労働に従事した。八九年（二二）秋迄はサンフランシスコに居住した模様。サンフランシスコ時代には商業学校に通学し、また滞米中一貫して経済学の自修に努めた。	

*同攻会とは、東京専門学校講師卒業生其他東京専門学校に縁故ある法文理三学篤志の人々の組織するもので、各地にその支部のようなものをもった。横浜講学会もその一つであった。

一八八八（二一）		四月二六日 米国桑港通信（読売新聞）
一八八九（二二）	この年秋頃より、一八九二年（二五）秋迄、シアトルに一時いた以外は、タコマに生活の本拠を置いていた。	一〇月五日 ヤンキー第一回（読売新聞第四四二八号）
一八九〇（二三）		五月三一日 北米合衆国の労役社会の有様を叙す（読売新聞第四六五一号） 六月七日 同右（第四六五八号） 六月一〇日 同右（同四六六一号） 六月一三日 同右（第四六六四号） 六月一八日 同右（第四六六九号） 六月一九日 同右（第四六七〇号） 六月二三日 同右（第四六七四号） 六月二四日 同右（第四六七五号） 六月二五日 同右（第四六七六号） 六月二六日 同右（第四六七七号）

一八九一（二四）			六月二七日 同右（第四六七八号） 八月七日 日本に於ける労働問題（読売新聞第五〇八四号） 八月八日 同右（第五〇八五号） 八月九日 同右（第五〇八六号） 八月一〇日 同右（第五〇八七号）
一八九二（二五）	この年の秋、タコマよりサンフランシスコに帰り、この時サンフランシスコの職工義友会に加入したものと思われる。		五月二〇日 金井博士及び添田学士に呈す（国民新聞第七一七号） 一一月一日 「愛国」記者に告ぐ——労働問題の一端（遠征第一九号）＊ 一一月一五日 同右（第二〇号）
一八九三（二六）	この年春、東部に向かい、しばらくシカゴに留まり、翌年三月以前にマサチュセッツのグレイト・バーリントンに赴いた。		二月一一日 富国の策を論じて日本に於ける労働問題に及ぶ（東京経済雑誌第六六一号）＊ 二月一八日 同右（第六六二号）

＊『愛国』はサンフランシスコ日本人愛国者同盟の邦字機関紙。『遠征』はサンフランシスコで発行された邦字雑誌。

＊これは一時日本へ帰国した時に寄稿したものと思われる。当時高野は飛脚のように日本とアメリカを往復していたことが、『遠征』に報ぜ

一八九四	（二七）	三月六日 ＡＦＬの会長サミュエル・ゴンパースに初めて手紙を出し、ＡＦＬのように職業別の組織方針をとるべきか、Knights of Laborのように地域別の組織方針をとるべきかについて質問した。 五月初めには、ニューヨークへ移った。 五月末、ゴンパースの紹介で Cigar Makers International Union に、共済制度について質問した。 八月一一日付で Grand International Brotherhood of Locomotive Engineers に、そして恐らく同時に Brotherhood of Locomotive Firemen にも手紙を出して、労働組合運動のあり方について質問した。 八月中旬には、ゴンパースとの会見を決意した。 八月二五日 Knights of Labor に、労働組合の組織方針について質問の手紙を出した。 九月四日 ゴンパースと初めて会見したと思われる。 以後数回会見した。 一〇月二二日付のゴンパースからの手紙によれば、高野は既にＡＦＬの General Organizer に任命されている。 九月末には帰国の予定をたてており、一〇月	一〇月 Labor Movement in Japan (American Federationist vol. 1, No. 8)

られている。

	末頃アメリカを離れた。アメリカの小砲艦の乗組員として艦内の労務に従事し、欧米の各港に寄港しつつ帰国したものと思われる。		
一八九五　（二八）	三月には東京に滞在していた。四月末には Machias号（アメリカの小砲艦？）に乗り、中国芝罘に行った。その後も秋迄に何度か中国へ行き、朝鮮にもしばらく立寄り、一八九六年初めに日本へ帰ったものと思われる。この間の仕事は従軍記者だったと思われる。		
一八九六　（二九）	二月一八日付のゴンパースからの手紙によれば、高野は General Organizer に再任されている。七月初め頃より、横浜の日刊英字新聞 Japan Advertiser に勤めた。この頃弟岩三郎と共著で袖珍和英辞典を大倉書店より発行。	七月 The War and Labor in Japan (Social Economist vol. 9) 九月 The Japanese Worker's Condition (American Federationist vol. 2, No. 7)	
		三月 Chinese Tailors' Strike in Shanghai (American Federationist vol. 3, No. 1) 七月五日 日本の労働問題（太陽第二巻第一四号） Labor Problem in Japan (Taiyo vol.2, No. 14, etc) 一〇月二〇日 北米合衆国に於ける保護貿	

	一二月初めには既に Advertiser を辞して上京し、国会に対する労働組合法制定の請願を計画している。		
一八九七（三〇）	二月七日 玉泉亭における社会政策学会の例会に、弟岩三郎に伴われて出席。 四月 沢田半之助、城常太郎らと職工義友会を結成し、六日に神田錦輝館において第一回演説会を開いた。席上高野の執筆したパンフレット「職工諸君に寄す」を配布した。 四月二四日 神田学士会事務所における社会政策学会の例会に出席。* 六月二五日 職工義友会の第二回労働問題演説会で演説。演説会終了後労働組合期成会設立の必要を訴えた。	易主義（太陽第二巻第二一号） 四月二〇日 Typical Japanese Workers (Far East vol. 2, No. 4, etc) 五月一五日 我国に於ける労働問題（社会雑誌第一巻第二号） 六月 Our Organizer in Japan (American Federationist vol. 4, No. 4)	*この時には、既に社会政策学会に入会していたものと思われる。

七月五日
労働組合期成会の発会式に出席。仮幹事に選ばれた*。

七月一八日
労働組合期成会第一回演説会で演説。

七月二六日
東京鑪製造業組合の総会に招かれ、組合奨励の演説をした。

七月三一日
牛込における演説会で、鉄工を対象にして、組合結成を訴えた。

八月一日
期成会第一回月次会に出席。幹事に選ばれた。

八月一五日
芝三田、唯一館における期成会第二回演説会で演説。

八月二一日
石版印刷職員組合総会に出席して、組合奨励の演説をした。

八月二二日
埼玉県大宮末吉座における演説会で演説。

八月三一日

六月二〇日
Strikes in Japan (Far East vol. 2, No. 6, etc)

七月一五日
自殺的日本の工業（社会雑誌第一巻第四号）

*「労働組合期成会成立及発達の歴史(一)」（『労働世界』第一五号）では、四日になっている。

牛込鶴扇亭における東京砲兵工廠小銃科在勤の期成会員主催の演説会で演説。

九月一日
東京船大工職工組合総会に出席して、組合奨励の演説をした。

九月一八日
神田青年会館における演説会で演説。

九月二〇日
東京雛人形組合発起会に出席して、組合設立の必要を説いた。

九月二一日
錦輝館における労働組合期成会の演説会で演説。演題「資本と労力の調和」。

一〇月九日
両国井生村楼の演説会で演説。

一一月二日
芝区在住期成会員有志主催の演説会で演説。

一一月二一日
神田錦輝館における演説会で演説。演題「資本と労力の調和」*。

九月
A Remarkable Strike in Japan (American Federationist vol. 4, No. 7, etc)

一〇月
From Our Organizer in Japan (American Federationist vol. 4, No. 8)

一一月
Prospects of the Japanese Labor Movement (American Federationist vol. 4, No. 9, etc)

*「労働組合期成会成立及発達の歴史(三)」(『労働世界』第一六号)では、二〇日になっている。

	一二月一日 鉄工組合発会式に出席、開会の辞を述べた。		
一八九八（三一）	一月九日 本所二州楼の演説会において、片山潜らと演説。 一月二九日 埼玉県大宮市末吉座の演説会で演説。 一月三〇日 横浜蔦座の演説会で演説。 二月七日 本所二州楼の演説会で演説。 二月二〇日 神田青年会館における演説会で演説。	一二月一日 北米合衆国石炭坑夫の同盟罷工（一）（労働世界第一号） Female Labor in Japan (American Federationist vol. 4, No. 10, etc)	一二月一日 『労働世界』創刊。
		一月 Proposed Factory Act in Japan (American Federationist vol. 4, No. 11, etc) 二月 A New Trade Union in Japan (American Federationist vol. 4, No. 12, etc) 二月一五日 労働者状態改善の方法苦言（労働世界第六号）	
			二月二四日―二五日 日本鉄道東北線機関方四〇〇名が待遇改善を要求してストラ

二月二六日
横須賀町立花座における労働組合期成会の労働問題演説会で演説*。演題「労働組合期成会に就て」。

三月六日
期成会全員が参加して野外遊戯をおこなうため、四月三日に運動会を開くことになり、運動会協議委員会総会開かれ、運動会委員となった。

三月二三日
運動会に関して日本橋警察署に召喚された。

三月二五日
警視庁に出頭。

四月一七日
横浜鉄工組合支部発会式に片山、佐久間らと出席。

四月二七日
きんぐすれい館における貧民研究会第一回会合に出席し、米価問題について発表した。

三月
Experience of a Labor Agitator in Japan (American Federationist vol. 5, No. 1, etc)

四月
Strikes in Japan (American Federationist vol. 5, No. 2, etc)

イキを行った。

*「労働組合期成会成立及発達の歴史(三)」(『労働世界』第一七号)では、二七日になっている。

三月二〇日
活版工同志懇話会結成。

四月五日
日本鉄道矯正会結成。

五月一五日
京橋区新栄町連合会事務所における期成会の小演説会で演説。

五月二一日
芝兼房町玉翁亭における期成会の小演説会で演説。

六月一九日
横須賀立花座における労働組合期成会の演説会で演説し、その後懇親会において、片山とともに組合に関する談話をした。

六月二六日
期成会の月次会で幹事に再選された。

七月一七日
第一三回月次会に出席。その後労働組合期成会一周年記念懇親会に出席し、開会の辞を述べた。

七月二三日
片山潜らとともに東北遊説へ出発。同夜大宮末吉座の演説会で演説。

五月
Great Railway Strike in Japan (American Federationist vol. 5, No. 3)

六月一日
随感録(労働世界第一三号)

六月一五日
東京だより
鉄工組合第何支部共働店規約(労働世界第一四号)

七月一五日
京央たより(労働世界第一六号)

七月二四日
福島県福島町（鉄工組合第二三支部所在地）万歳館で演説。
七月二五日
岩手県一の関で、日鉄矯正会一の関支部員と懇談。岩井座における演説会で演説。
七月二六日
青森県盛岡杜陵館の演説会で、矯正会盛岡支部員等を対象に演説。
七月二七日
青森市中村座で、矯正会青森支部員等を対象に演説。
七月二八日
青森県尻内にて矯正会員を対象に演説。盛岡にて鉄工組合支部設立の話合をした。
七月二九日
仙台市松島座の演説会に出席し、鉄工組合員等を対象に演説。
七月三〇日
宇都宮宝座の演説会で、鉄工組合員等を対象に演説。
七月三一日
帰京。

八月一日
東京たより
東北めぐり（一）（労働世界第一七号）
Labor Notes from Japan
（American Federationist

九月二三日
労働組合期成会第一五回月次会で、工場法案の修正運動を行うことが決議され、高野は片山らとともに陳情委員に選ばれた。

一〇月二三日
横浜蔦座における対工場法案政談演説会で演説。

一〇月二六日

vol. 5, No. 6, etc)

八月一五日
東北めぐり（二）（労働世界第一八号）

九月一日
東北めぐり（三）（労働世界第一九号）
Life Condition of Japanese Workers (American Federationist vol. 5, No. 7, etc)

一〇月
Street Car Service in Tokyo (American Federationist vol. 5, No. 8, etc)

一〇月一五日
黄口録（労働世界第二二号）

八月四日
印刷工懇話会再建。

一〇月一八日
社会主義研究会結成。

一八九九（三二）	五月六日	神田青年会館における社会政策学会の対工場法案学術演説会で演説。演題「職工の保護」。 一〇月二八日 工場法案に関して、農商工高等会議委員浜岡先哲・土居通夫らを訪問。 一一月二日 前工務局長志村源太郎を訪問。 一一月六日 錦輝館における対工場法案政談演説会で演説。 一一月二九日 期成会幹事会にて、常任幹事を辞任。後任には片山潜が選ばれた。鉄工組合参事会で常任委員を辞任。後任には片山潜が選ばれた。この後消費組合横浜鉄工共営合資会社*の責任者になった。	一一月 Japanese Farmers (American Federationist vol. 5, No. 9) 一二月一日 金子堅太郎君の演説に付いて（労働世界第二五号） Factory Legislation in Japan (American Federationist vol. 5, No. 10) 一月 Japanese Factory Legislation (American Federationist vol. 5, No. 11)	*高野の指導のもとに、鉄工組合第三（横浜）支部によって、一二月二二日結成された。

横須賀における演説会で演説。演題「職工教育の必要」。

六月二五日
期成会月次会で、片山とともに常任幹事に選ばれた。
鉄工組合第九回委員会総会で常任委員に選ばれた。この後鉄工組合本部に移転。

七月九日
神田青年会館における活版工懇話会主催の演説会で演説。演題「日本の労働運動の方針」。

七月二二日
新栄町における期成会の演説会で演説。

七月三一日
神戸における清国労働者非雑居期成同盟会の演説会で演説。

八月二日
神田青年会館における洋服裁縫業組合創立演説会で演説。

八月三日
南千住、伊吹楼における演説会で演説。

八月一五日
清国労働者非雑居期成同盟会の演説会に臨む（労働世界第四二号）

一〇月
Rodo Kumiai Kisei Kwai

九月
職工教育奨励会の結成を計画している。

一〇月あるいは一一月
京橋本八丁堀で石川島造船所、沖電機等の

労働者を対象に、消費組合共営社を設立した。

一一月三〇日
芝金杉、福亭における労働問題学術演説会で演説。

（American Federationist vol. 6, No. 8）

一二月一五日
噫、滝沢安久利君（労働世界第五一号）

一一月三日
活版工組合結成。

一二月一〇日
石川島造船所の労働倶楽部が、共営社の二階にできた。

一月二八日
社会主義協会結成。

三月一〇日
治安警察法公布。

一九〇〇　（三三）

一月三〇日
鉄工組合の役員の名称が変わり、常任委員だった片山と高野はそれぞれ常任幹事、幹事と称するようになった。

三月一〇日
普通選挙期成同盟会に入会し、幸徳らと共に幹事に選ばれた。

四月
普通選挙期成同盟会の総会で演説。

五月一日
職工組合に就て（労働世界

		第六〇号） 五月一五日 職工組合に就て 鉄工組合刷新私案（労働世界第六一号）
	九月 労働組合運動から引退して、北清事変下の中国へ渡った。	
一九〇四　（三七）	三月一二日 肝臓膿腫のため青島のドイツ人病院で死去。同地において葬儀を営み、遺骨は東京に送られ、駒込吉祥寺に葬られた。	